

<資 料>

アメリカ精神史を画する制度主義 (2)

アントニオ・モンターネル著
佐々野謙治訳

B. 制度主義の精神的根源

古典主義の国民経済学は、その原理上の見解や成果の大きな統一と緊密さによって他に抜きん出ていたが、それと全く同様に、古典主義と多かれ少なかれ相対立する他の理論的把握を刺激するものとしても、それは他に抜きん出ていた。正統派経済理論とのこの対立に、あらゆる新しい経済学は負っている、とりわけ経済の研究にとかくつきまとう問題や現象についての不断の実り多い論議はそうだ。スミス (Adam Smith) やその他の同じ系統の国民経済学者達の認識や公式について、科学的な論争が150年以上にわたって続けられてきたということは、その論争により惹起された国民経済学的思考の新しい時代に、古典主義の理論が遍在していることの十分な証である。人々が、一致してたびたび正統派の経済学を拒絶し、それに反対すればするほど、これらの見解の相違が国々によりまた時代時代によって呈した形態も種々であった。

アメリカ合衆国においては、その見解の相違が、20世紀になってますます大きくなり、そして遂にはほとんどもっぱら、人が(ほぼ1910年以後)それに<制度学派>という名称を与え、それ自体かく呼ばれてもきているかの理論的方向と結びついた。だがそれでも、制度主義的把握を弁護する多くの者が、異なった意図を追求し、また制度主義的把握の目的設定、その内容および方法論に関して、しばしば広範な相違を示しているということが、まぎれもなく確認されるのだ。それに、制度主義者達——そのすべてのものが種々なしばしばひどくあいまいに表現された課題の研究に携わっている——の精神的統一のきず

なはきわめて薄く、それらに「学派」という表現を用いるのも、ただ最も弾力的な意味においてのみそうするのが正しいように思える。同じくまた人は、制度主義的方向は単に近代北部アメリカ経済理論の一定の著名な代表者の著作のうちのみあるとか¹⁾、あるいは、かかる特殊の思考過程は20世紀以前の国民経済学には知られていなかったとか、推論してはならない。否、制度主義的性格をもつ研究は、すでに久しく以前から、あらゆる国民経済学において重要な位置を点めていた、ということが固執されねばならない。歴史的・制度的素材は、制度主義者のずっと前に古典主義者によって、理論的分析の基礎やその例証として用いられていたのだ²⁾。だが、古典主義者やその追従者達は、かかる種の研究を二義的な種の「記述」として軽視する傾向があった。しかるに、古典主義者と意見を異にするかの学者や学派の著作においては、制度主義的特徴をもつ叙述が前景に現れた。かくして、(単にその例としてあげれば) シスモンディ (Simonde de Sismondi)³⁾ オーエン (Robert Owen), ミル (John Stuart Mill)⁴⁾ およびジョーンズ (Richard Jones) の文献が、ある程度「制度主義的」であったとみなされうる。そして、とりわけ重要なのは、〈ドイツ歴史学派〉が、経済制度の絶えず変化している構造や、この社会的形態変化への生活や思考の適応の増大に、最も深い関心を示したということだ。それにもまして、カール・マルクス (Karl Marx) の関心は、経済制度の発展や、この発展が経済的権力の配分に対して有する直接的ないし間接的な関連の追求に向けられた。さらに他の社会思想家達も、包括的な社会構造の改築・新築の手段と方法を見出すために、経済制度の起源およびその作用に立ち入った検討を加えた。恐らく、全く一般的にはこう言えるであろう。制度主義的関心は、きわめて種々の種の改革運動と結びついていたし、つまりはおきまりの私利、構成された「社会性」および硬直的な制度の構造といった領域に流れ込む、そのいずれの種の経済学的解明をも好まない、と。「制度主義」という名称は、何よりもまず、アメリカにおいてかなり詳しく描かれうる経済的思考の局面をその内容とする概念を表わしているのだが、このアメリカ本来の制度主義が、アメリカでのみならずヨーロッパでも生じた社会科学全体の内部での一定の発展と確かに緊密な精神的

血縁関係を有しているのだ。はたして——ただ若干のアメリカの例をあげれば——法学のパウンド (Roscoe Pound) やハール (R. L. Hale), 歴史・国家学のベアード (Charles A. Beard) やロビンソン (J. H. Robinson), および社会学のライト (Carroll D. Wright) やオグバーン (Willam F. Ogburn) の研究が、一連の類似の前提の上に構築されている。

- 1) 以上と同様に以下も, 「The Institutional School」 von Paul T. Homan in *Encyclopaedia of the Social Sciences*, herausgegeben von E. R. A. Seligman und A. Johnson, New York. 1931. V, 387 ff.
- 2) これについては, Walter Eucken, *Die Grundlagen der Nationalökonomie*, IV. Aufl. Jena 1944, 29 ff. を参照せよ。
- 3) Charles A. Beard und Mary R. Beard, *The American Spirit (A Study of the Idea of Civilization)* Vol. IV: *The Rise of American Civilization*, New York 1942, 94.
- 4) John M. Clark, *Recent Developments in Economics*, in: *Recent Developments in the Social Sciences*, Philadelphia und London 1927, 271.

<イギリス>や<フランス>にも、制度主義の学派に直接的な影響や刺激を与えた集団のあったことが指摘されうる。フランスの連帯主義やイギリスのフェビアンのように、主として社会改良の計画に係りあった集団がそれだ。「1917年直前の数年は、アメリカの知識人達がヨーロッパの集産主義哲学、すなわちマルクス主義、フェビアン主義、サンデカリズム、ギルド社会主義に熱中した年であった。新しい指導者、つまりアメリカ経済の辛辣な批評家であったヴェブレンのような哲学的分析家達が出現しつつあった。社会主義の影響は、アメリカ人の思考を長い間混乱させてきた政治的および社会的ロマンテシズムの最後の切片を、一掃しつつあった」¹⁾。

- 1) Vernon Louis Parrington, *Main Currents in American Thought*, New York (1927) 1945, III 412.

<連帯主義>の体系は、個人主義や社会主義の体系に対置されうるもので、それは以下の前提から出発する。すなわち、人間はなるほど独立への志向、つまり自由なイニシアティブや活動への、また諸力の妨げられない展開への意志

によって支配されている、しかし同時に人間は、連帯意識、つまり人間および人間間の生活の共属性や内的同価値性の意識によっても満たされている、今やこの意識はこの意識で、志向された人間の自由に制限を課し、個人に共同体への義務を命じる、だがそれは、志向された人間の自由を拒否することなく、また個人をもっぱら全体の不可欠の部分だとみなすことなくなされる、というのが連帯主義がそこから出発する前提だ¹⁾。従って、社会連帯主義においては、個々人の人格権および個人の自由や妨げられない活動や個人利益の保護を目指して結合する権利が認められるが、他方ではしかし、社会組織が形成される。それは、かの自由な私的活動の社会的条件を維持し改善するためであり、またこの条件の調整を、あらゆる社会集団をその「社会的価値」に応じて評価するところの「平等」という意味で行うためである。社会的、また従って国民経済的組織のもとで重要なのは、有機体、つまり社会の物的諸力や精神的・道徳的諸力から生れ、構造上成長してそれになる組織である、というのが社会連帯主義の核心をなす見解なのだ。「社会生活の有機的産物として組織は、自然のおよび歴史的前提条件——絶えずこれまで社会において、才能や能力、社会的地位や職業域、財産や所得、業績や功勞に応じて、大きな人間分化を生み出してきた前提条件——に常に依存しているであろう。整序的または形成的に干渉できる精神的・道徳的諸力の産物として組織は、同時にまたこの諸力、つまり自然のおよび歴史的前提条件によって与えられた生活の重圧や人格発展にとっての障害を緩和あるいは除去できるし、また当然そうすべきである諸力が関与する対象でもある。国民経済という組織への、意識的干渉による、例えば自由交易制限の撤去やかかるものの導入による関与がおこりうるのは、三つの先にかかげられた方向（つまり個人主義的、社会主義的および連帯主義的体系）のうちの一つにおいてだ。それ故に、これらの組織形態は、同時に我々に、社会の整序をめぐる戦いにおいて相互に対立する経済政策上の理念を示している。国民経済という組織の実情は、目下どの国においても、交易経済体制の優位を示している。それ故に人は交易経済を目下の国民経済的組織の基礎と呼ぶうのだ……」²⁾。社会連帯主義が初めてその形成をみたのは、フランスの社会学者でもあり政治

学の著者でもあった人達、例えばコント (Auguste Comte) やブルジョア (Léon Bourgeois, 『連帯性』, 1896) またデュルケーム ((Durkheim, 『社会分業論』, 1893) やブーグレ (Bouglé, 『連帯主義』 1907) のもとであった。それと確に広く相似するものが、「保護主義的連帯」を言々するリスト (Friedrich Lists) の連帯の体系のうちにも見い出される。連帯主義と立法部、つまり多かれ少なかれ強固に、またしばしば連帯主義の公準を実行する立法部との間の関係は密接だ。はたして、フランスでの社会立法の開始は連帯主義運動のおかげにされる。ドイツでは、法学的連帯主義の変種がメンガー (Anton Menger)³⁾ によって主張されたが、ブリーフス (Briefs), ステェガーバルト (Stegerwald), シェーラー (Scheler) およびペツシュ (Pesch) といった人々は、むしろ社会学的・キリスト教的連帯主義を得ようと努めている。これらの連帯主義の体系がその基礎としているのは、諸個人の極限までの経済的自由——この自由によるその極限を課すのは社会的福祉である——ということ、および経済的強者と弱者間の法的平等ということだ⁴⁾。

- 1) Eugen von Philippovich, Grundriß der Politischen Ökonomie, XV. 1920, I 31 f. 一連帯主義については、特に, Charles Gide/Charles Rist, Historie des Doctrines Economique depuis les Physiocrates Jusqu'à nos Jours, 3. Aufl. Paris 1920, 693 ff を参照せよ。
- 2) E. V. Philippovich, a. a. o., 31.
- 3) Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, IV. Aufl. 1910. と Das bürgerliche Recht und die besitzlosen Volksklassen, IV. Aufl. 1908.
- 4) これについては, Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie, 1905-1909; Heymann Die Weltkredit- und Finanzreform, 1921; Hofius, Liberalismus, Sozialismus, Solidarismus, 1921. を参照せよ。

連帯主義の一般的志向によって強調された根本思想は、個人主義と社会主義の間にある国民経済の理念形態に関する教義のすべてに、等しく固有のものだ。だが、それを受け入れることから、フィリップポビッチ (Philippovich) もそれに注意を促しているように¹⁾、必然的に一定の経済組織は出てはこない。と言うのも、その連帯主義の根本思想は、「自由」と「権威」のいずれかが現実的な人間の連帯によりよく照応するかを、個々の場合において検討すべきである、

と立言するだけでもっぱら満足しているからだ²⁾。これら二つの可能性の間の、考えられうる過渡的諸形態の選択は、きわめて種々の考慮を払ったのちになされるであろう。すなわち、「人は、理論的に、個人主義的な社会または社会主義的な社会を構成し、その機構の原則を確定することはできるが、典型的な連帯の体系を描くことはできない。従って、連帯の見解の本質なるものは、なかなか、自由と権威が等しい強さをもった諸力として作用している国民経済組織の発展を認めることのうちにある……」³⁾。連帯主義的諸形態の歴史的萌芽は、ウェバー (Max Weber) によって、何百年も前に逆って追求されており、例えばすでにそれは、官僚主義的古代国家の職業身分秩序のもとに、ローマカイゼル王国の市民あるいは中世フランスの農民同盟のもとに見い出される⁴⁾。連帯主義は、確かにアングロ・アメリカの経済学説にも直接的な影響を及ぼしたのであり、と同時にそれは制度主義の形成にも貢献したのだ⁵⁾。

- 1) E. V. Philippovich, a. a. o., 31.
- 2) Hans Gerber, Freiheit und Bindung der Staatsgewalt, Tübingen 1932, 13 ff を参照せよ。
- 3) E. V. Philippovich, a. a. o., 32.
- 4) Max Weber, Wirtschaftsgeschichte (herausgegeben von Hellmann und Palyi), II. Aufl. München/Leipzig 1924, 78., 287 f.
- 5) 「恐らく、最近の経済学の中で最も成熟し定着した傾向、しかも一つの名称と一つの意識的なまとまりをもったその傾向は、フランスの連帯主義であろう。その前提—その名称ではない—が、最近のアングロ・アメリカの経済学の大部分をつくり上げた。それと最も近い関係をもつのは、恐らくイギリスで最も目立っている〈厚生経済学〉—発生的・進化的・歴史的経済学はその一部とみなされる—であり、非功利主義的な種の心理学的経済学、それに記述的・統計的経済学、すなわち市場機構の働きの現実的研究ないし直接的・間接的な意味で〈市場の制度〉に係わりあう経済学だ。」Recent Developments in the Social Sciences, John M. Clark, a. a. o., 260.

フェビアン協会（「フェビアン協会」という名称のもとに1883—1884年にバーナード・ショウらによってロンドンに設立された）は、イギリスの自由主義的政党を社会主義的なものに変革することを目的とし、公的企業を拡大することによって個人主義的経済秩序を制限しようと努めた。ハインドマン (H. M. Hyndman) によって設立された社会民主連盟と、むしろ知的で自治的なフェビ

アンとの連合から、目下イギリスで屈指の労働党 (1903)¹⁾ が生れた。そしてこれが、1900年に統一された労働代表委員会の新しい組織形態を具体化した。社会主義の理念がイギリスに浸透した原因の大部分は、フェビアン協会、とりわけその主要指導者であり最も重要なイギリスの社会主義者でもあった ウェブ (Sidney Webb)²⁾ の影響に帰せられる。このむしろイギリスにおける社会政策の発展にも相当するものが、制度主義的な関心を高めた。しかもその関心は、ケンブリッジ大学という比較的的正統派の領域でよみがえった。しかるに、数多くの制度主義的な諸研究——とは言え、この研究がアメリカ制度主義の慣用語、ことに ヴェブレンによってその形成をみた慣用語でなされているのではないが——への、およそ直接的な責任は、ロンドン経済学校のキャナン (Edwin Cannan) にあった³⁾。「制度の進化」を信じたので、当時の制度主義的理論は、「フェビアン急進主義に自然的な魅力」を覚え、「その型の運動に親近感」を抱いたのである⁴⁾。

- 1) Carl Brinkmann, *England seit 1815 (Politik, Volk, Wirtschaft)*, II. Aufl. Berlin 1938, 260 f を見よ。—さらに、E. V. Philippovich, a. a. o., 460 f.
- 2) Von Sidney Webb (geb. 13. 7. 1859, Prof. d. Nationalökonomie in London) が、この関係において詳しく論じたのが、次の作品である。彼はこれを夫人の Beatrice Poffer と共同で書いた: *Geschichte des Trade-Unionismus* (II. Aufl. dtsh, 1906); *Theorie und Praxis der englischen Gewerkvereine* (2. Bed., II. Aufl. dtsh. 1906); *Das Problem der Armut* (I. Aufl. dtsh. 1912).
- 3) Vernon Louis Parrington, *Main Currents in American Thought*. New York (1927) 1945, III 412.
- 4) J. M. Clark in 「Recent Development……」, a. a. o., 273.

すでに19世紀の20年代に、北アメリカでは、「人道主義運動」という形で改革の志向が台頭した。それはオーエン (Robert Owens) のアメリカ訪問 (1825) によって持続的な刺激を受けた、もっとも ニュー・ハーモニー (インディア) におけるオーエンの人道の実験は失敗に帰したのであったが¹⁾。オーエンによって主張された理論——多くの点でかのフーリエ (Charles Fourier)²⁾ のそれに似ていたが、それよりむしろイギリス人の実践的でまじめな意識を認識させたそれ——は、人間をこうみていた。およそ平等に生れてくるが、同時に異な

った才能を現す人間とは、概して、その環境の産物である、と。何より、人間をとりまく社会的環境の状況が、人間を、彼がのちにあるところのものとなす故に、この状況を変えることが重要なのだ。それ故にオーエンは、教育や「阻止的」な外的要素を除去することに、特に力を入れるのである。

- 1) これについては、Ernst L. Bogart und Donald L. Kemmerer, *Economic History of American People*, New York/London/Toronto 1944, 427 f に詳しい。
- 2) E. L. Bogart und D. L. Kemmerer, a. a. o., 428 über Fourier und dessen amerikanischen Popularisator Albert Brisbane sowie andere Reformtendenzen.

〈発展思想〉の輝かしい行進は依然として続き、アメリカ精神においても徹底した従者を従えた。そして進化主義は、ヨーロッパと同様にアメリカにおいても、社会科学の領域に押し入った¹⁾。ダーウィン (Darwin) の影響は北アメリカにおいてきわめて著しかった。「生存のため戦い」という言葉は、拘束されない経済的競争を鼓舞するものだと考えられ、強者勝利の信念は、新しい論拠をもって、弱者への国家的保護のすべてに反対した。確かに、制度主義の見解の形成は、発展思想が社会生活の多くの諸領域に転用されたことへの反応なのだ。スペンサー (Spencer) はスペンサーで、広い視野をもってダーウィンが把握したあらゆる現象を考えなおし、そしてこう言明した。およそ物質的なものは、絶えまない相互作用を通して成ったもの、それが我々に今や現象するところのものだ、と。有機的存在が、適応と遺伝を通じて発展し、ますます高度な形態を得るように、精神的な能力も、まずは徐々に形成されてきた (我々の精神の今日の先験的要素も、もともとは我々の先行者によって獲得されたものであった)。それと全く同様に、社会機構もまた、人為的に創られたのではなくて、漸次的有機的に形成されてきたのだ。スペンサーにとっては、およそ存在の本質は発展のうちにある。従って彼はヘラクレイトス (Heraklits) の哲学の核心を再び取り上げるのだ。こうしてスペンサーは、物質的・精神的なすべての現象の一般的連関の思想と発展の思想とによって、ヘーゲル (Hegel) と密接に結びつけられるように思える²⁾。

- 1) Rudolf Eucken, *Geistige Strömungen der Gegenwart*, VI. Aufl. 1920, 132 ff.
- 2) Otto Gaupp, *Herbert Spencer*, V. Aufl. Stuttgart 1923, 158 は両者を区別するところのものを詳しく論じた。

さてシュペンサーは、他方では発展の問題に、ウォーラス (Wallace) やダーウィン、ある意味ではコントもおこなったように、生物学的見地から接近したのではなく、彼の最初の著者から伺えるように、倫理的・政治的な側面から接近した。社会倫理的問題の研究を進めているうちに、まず彼は、真の倫理学や社会学は生物学や心理学の上に構築されなければならない、ということを経験した。だが、さしずめスペンサーは、もっぱら人間進歩の自然必然性を信じた。1842年に書かれた彼の最初の著作・『統治の固有の側面』の中で彼は、社会生活もまた動かしたい自然法則の作用下にあるとし、この法則から人間進歩を推論する。ここでは、いわゆる「自己治療」の過程が大きな役割を演じている。それは「人間本性の自然的・社会的環境への適応ということだ、すなわちラマルク (Lamarcks) の発展理論が彼に思いつかせた考えだ。この論考の主要弱点は、彼がよって立った神学的基礎にあった。スペンサーは、ここでもなおペーリ (Paley) の倫理的理論を分有しているのである。およそ人間行為の目的は、スペンサーによれば、幸福ないし福祉であって、この目的達成は一定の諸条件の充足いかんにかかっている。しかし彼は、今やさらにすすんで、この諸条件を事物そのものの本性にその基礎を有するものとして立証しようと試みるのではなく、それをいとも簡単に神の法とみなすのだ¹⁾。人間行為の動機を幸福志向だと公準化することで、若きスペンサーは、一連の効利主義哲学者——自分自身や他人に役立つように生きることを最上の道徳であるとみなす人々——に与する。この関連において、ダーウィンやスペンサーの精神的意義とマンダヴィル (Berrad Mandevilles) の『密蜂物語』との間にある相似を指摘することはたやすかろう。オランダ生れのイギリス医学者・マンダヴィル (1670—1733) は、実験自然科学から動物社会学的観察法をとり入れ、それを社会的人間行為の分析の手助けとして用い、この分析を風刺的詩という文学の形で公

にした。

1) O. Gaupp, a. a. o., 51.

スペンサーは、後に彼の当初の効利主義的見解に不満をだくののだが、それは、1850年に公刊された彼の著書・『社会静学』の中に現れる。ここで彼は、効利主義的倫理と直感的倫理とを宥和させ、人間の発展についての彼の考えをさらに詳述する。スペンサーにとって、およその進歩——そしてこの事実が当面の関係でも特別の関心事なのだが——とは、人間の自然的・社会的環境への持続的なより良い適応の結果なのだ。これは、要するに彼の全社会学の中心的思考を表明したものであり、それを彼は、コールリッジ (Samuel T. Coleridge) やシェリング (Schelling) から受けついでであろう「統合」と「分化」という理念によって補足する。進化主義的思想を人間間の領域へ転用することで、ハーバート・スペンサーは、——シェッフレ (Albert Schäffle), ウォルムス (Rene Worms), リーリエンフェルト (P. Von Lilientfeld) とともに——正真正銘のまさに「有機体論的社会学」の最も傑出した代表者となった。スペンサーは、彼の『社会学原理』——これを彼は総合哲学という彼の体系の包括的な枠組の中で論述した——に、社会学的な問題についての彼の長年の研究成果をもっぱら収め、社会有機体と個体的有機体との間の類比を手掛りに、社会発展は発展という一般的な世界過程の一部にすぎないということ、またどうしてそうなのか、ということを明らかにした。その個体的「有機体」と社会「有機体」との間にある相似の主要点は、ガウプ (Otto Gaupp) によれば¹⁾、総じて以下のように素描されうる。すなわち、

「1. 有機体は、小さな集りから始まり、知らず知らずのうちに大きくなっていくから、若干の有機体は、つまりはそれが当初からあったところの何千倍にもなる。

2. 有機体の構造は、初はきわめて簡単なもので、ほとんど無構造のようにも思えるが、それが大きくなるにつれて構造上の複雑さも絶えず増大する。

3. 有機体の当初の複雑でない状況のもとでは、諸部分の相互依存なるもの

はほとんど存在しないのに、それが徐々に増大し、遂には各部分の活動と生命が他の部分の活動と生命によって規定されるほどに大きくなる。

4. 社会の生命は、それを形成している諸単位、つまり、生れ成長し増殖し志向する諸単位の生命よりも長く存続し、それらから独立している。この諸単位が形成している社会体は、時代から時代を生きのび、同時にそれは、集合体としてその構造の完全性と機能的活動の多面性を増す……

他方スペンサーは、社会有機体と個体的有機体との間にある相違も見逃さない。すなわち、

1. 社会は一定の外的な形態をもたない。
2. 個体的有機体がそれらか成っている活動単位は、相互に関連している集合体を形成するが、社会の活動要因はそうではない。
3. 個体的有機体の単位は、たいてい相互の確固とした位置を有するが、社会有機体の単位はその位置を変えて移動できる。そして、
4. 最も重要な相違はこうだ。すなわち、動物体(有機体)にあっては特殊な単位が感覚を与えられているのに、社会生命においてはすべての単位が感覚を与えられている。」

1) O. Gaupp, a. a. o., 131.

制度主義という精神上の現象に関して、スペンサーのもとで特に注目に値すると思えるのは、彼が、家族、教会、国家および儀式という制度の成立と意義を多くの歴史的特徴のうち明示し、国王・僧侶の権力から職業の発展をあとづけし、またついで経済体制の発生史の概略を与えているということだ。そして特徴的なことには、スペンサーは、これらの種々の諸制度についての彼の社会学的主要著作の個々の巻に、次のような表題をつけた。『儀式の制度』(1879)、『政治の制度』(1882)、『教会の制度』(1885)、『職業の制度』(1895)、『産業の制度』(1896)、というのがそれだ。

哲学者でもあったスペンサーが、同時代の、また後のアメリカ精神に与えた影響を判断するために、思い浮べられなければならないことは、彼の著作の評

価では、北アメリカがイギリスよりも先んじていたということだ。哲学的進化主義をアメリカの地になじますように努めた卓越した人々の中で、フィスク (John Fiske) は、確に最も重要な人である。総合哲学の輝かしい流布者として、またコントの連続性の法則をアメリカの過去へ適用した歴史家として彼は、イギリスおよびフランス思想のもつ革命的影響を「黄金時代」のアメリカにもたらした¹⁾。またアメリカのユーマンズ (E. L. Youmans, 1821-87)——彼は1817年『月刊大衆科学』という雑誌の基礎づくりをした——が、ガウプによって²⁾、「スペンサーの発見者」と呼ばれるのも恐らく正しかろう。スペンサー自らがアメリカでの長期旅行を企てた。その旅でスペンサーは、彼の重要な信奉者達のほとんどと個人的に識りあい、また新しい友人達——彼らはこれまで進化論のアメリカが彼の体系に示さざるをえなかった現実的関心を全く無視していた——を得た。「確に、この世でアメリカほどスペンサーの著作がねんごろに受け入れられたところはどこにもなかった……新世界の生活には有力な樂觀主義がみなぎっており、スペンサーの理論は、すでに早くから強い勢力をもっていた進歩の観念を、あらゆる点で強化するために利用された³⁾。そして、彼の学説の社会的・経済的な内容から、アメリカでの制度主義的思考の発展とその流布を惹起したかの刺激の大部分が、流れ出たかもしれない⁴⁾。はたしてコモンズ (Commons) もこう言うのだ。うちわでなされるのを常とするスペンサーをめぐる論議は、彼の昔を回想することである、と⁵⁾。ハリス (Harris) や他の重要な学者達も、常に意識してそうしたというわけではないが、スペンサー哲学への信奉者を募った。「高等學術機関でのスペンサーの影響は決して小さくなかった。ハーバードのエリオット (Eliot) やフィスク、コロンビアのバトラー (Butler)、エールの輝かしいサムナー (Willam G. Sumner) といったあらゆる人達が、若き産業人、僧侶、著述家、教師達の精神に、この独学のイギリス人の教を吹き込んだ。社会学の研究を流布させ、その最初の教科書を出したのはスペンサーであった。〈抽象的経済学者のいう経済人が社会学者のいう普通人となりうる〉のはいかにしてか、ということを示したのも彼であった。彼はホモサピエンスを機械の水準にまで還元した。彼のその機械論的哲学は当時の

文化にうまく適用されたので、彼は当時の理論家の巨匠として暖く迎えられた」⁶⁾。法学においても、その彼の影響は効果を現した⁷⁾。スペンサーが果たした決定的な役割は、彼の進化哲学的な諸見解の実り多い成果のうち現れているだけではなく、彼の学説の論議——この論議で人は、独自の、しばしば異なった特殊の見地を苦心してつくり上げようと試みた——のうちにも現れている⁸⁾。

- 1) V. L. Parrington, a. a. o., III 203.
- 2) O. Gaupp, a. a. o., 6.
- 3) Ch. A. Beard und M. R. Beard, *The Rise……*, a. a. o., 407.
- 4) 「ダーウィン主義を想起させるが、それよりもはるかに、＜永久的の制度＞の弁護者達を困惑させたのが、ハーバート・スペンサーの総合哲学であった。この哲学は、進化の概念を、倫理、政治、経済および儀式一般に応用した。かくしてそれは中世紀にエマソンによってなされた予言を成就したのだ。ダーウィン派の有機的進化の説明にはまだ不確なものが残ってはいたが、社会発展の一般の教義にはなんらの疑惑もなかった。すなわち、今や社会学者によって解明されたように、人類の経歴は、エデンの年代を越えたはるか以前の過去まで明らかにされ、原始未開から近代文明にまで至る多くの段階によって特徴づけられた」 Ch. A. Beard und H. R. Beard, *The Rise……*, a. a. o., 406. —さらに、V. L. Parrington, a. a. o., 193 ff.
- 5) E. Voegelin, *Über die Form des amerikanischen Geistes*, Tübingen 1928, 172.
- 6) Th. C. Cochran und W. Miller, *The Age of Enterprise (A. Social History of Industrial America)*, New York, 1943, 128.
- 7) 「スペンサーの諸著作が合衆国で大流行した。そして、法の決定が彼の理念の結果を示しているという多くの事例が、引用されるにちがいない。従って、機械論的社会学は、他のどこよりもアメリカの法学者の著作において、すたれずにいた。と言うのも、その理念が歴史学派の理念を強めるものと思われたからだ。歴史学派がもはやその地歩を固守できないということを意識しはじめていた人達の多くは、彼らの古い見解に、機械論的社会学の新しい形態を与えることによって、自分達は前進しているのだとうぬぼれることができたのである。歴史派の法学者と同じく、19世紀末の機械論的社会学者は、法を、その進化の、その持続的変化の中において検討し、これらの変化を社会そのものによって生じる変化と関連づけようと努めた。歴史派の法学者は、形而上学的法を、この変化をこうむらないものと見た。機械論的社会学者は、その法に代えて物理学的法を置いた。か、およそ実践的な目的にとっては、その結果は同じであった。」 Roscoe Pound, *The Spirit of Common Law*, IV. Aufl. Boston 1931, 162 f.
- 8) J. Mark Jacobson, *The Development of American Political Thought*, New York/London 1932, 523—Andreas Walther, *Soziologie und Sozialwissenschaften in Amerika und ihre Bedeutung für die Pädagogik*, Karlsruhe 1927, soff. — C. H. Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, 1930, 279.

スペンサーと並んで19世紀最後の10年および当世紀の転換期に、アメリカの精神生活や活動に常に強い影響を及ぼしたのが、ドイツ<歴史学派>であった¹⁾。ドイツ歴史学派が「純粹」理論の一面性や優勢に逆らったように、制度主義の主要な反論もまた、クラーク (J. B. Clark) によって企てられた古典派の問題設定の新しい復活に向けられた²⁾。制度主義者の歴史学派に対する、とりわけシュモルラー (Schmoller)——シュンペーター (Schumpeter)³⁾ によって制度主義者の指導者・教師の一人と呼ばれた——に対する関係については、アメリカとヨーロッパとの社会経済学の原理上の照応についての説明をなす際に、詳細に述べられるであろう。

1) Th. C. Cochran und W. Miller, a. a. o., 236.

2) Eva Flügge, 「Institutionalismus」 in der Nationalökonomie der Vereinigten Staaten, in: Jahrbücher f. Nationalökonomie und Statistik, 126. Bd. (1927 I), 337 f.

3) Joseph Schumpeter, Gustav V. Schmoller und die Probleme von heute, in: Schmollers Jahrbuch 50. Bd. (1926), 337 ff., 353.

すべての以上取り扱われてきた精神史上の諸萌芽は、もっぱら、制度主義の見解の展開にとってポジティブな形態要因を明らかに選び出したものだ。その本来の誘因は、ネガティブな事実を通してその結果として出てきた。つまりこうだ。——まず、古典学派の教義に固執する同時代のアメリカ国民経済学への相変わらず根強い反対が、批判者達の「集団意識」をつくりあげた。この批判者達は、申し立てられた異議、誰よりもまずヴェブレンによって申し立てられた異議の過激論に基づき、そして一体となるや、直ちに社会科学的公準を公知することで、一つの精神史的地位を獲得することとなったのだ。

この新しいアメリカの社会・経済理論の方向の弁護者達——彼らの科学的見解や方法は、なるほど個々まちまちであったが——は、正統派の古典派経済学説、すなわちその自然法的・個人主義的信念、その世界主義的大望、その生活領域の軽視を拒絶しようとする点で規を一にしている。彼らは、主として、「純粹」理論の抽象性や孤立的方法、つまり J. B. クラークに率いられた数理限界効用学派のアメリカの分枝に逆らうのだ。1907年にクラークの『経済理論

の本質』が公刊されたが、これが反対運動をその極点にまで押し進めたのである。

「天気のように移ろいやすい」機械時代は、教義的経済学や哲学的絶対主義に、そうそう都合のよいものではなかった。J. B. クラークが、「黄金時代」の終り頃、富の分配を功勞に応じて行う資本主義体制を弁護するために、きわめて首尾よく用いた弓を引くほどに、自分を強いと思う者は誰一人としていなかった、否、その弓を引こうと試みるものさえいなかった。ヴェブレンが、かってアメリカが体験したクラークの矛盾を、強烈な学問的諷刺をもって明らかにした後には、ことにそうであった。なるほど、多くの国民経済学者は、経済学の教科書を、その科学的価値については論究されえない従来のやり方で書き続けている。だが、科学からみた資本主義は、すでに自らそれ自身の墓穴を掘り始めていたので、もはや、アダム・スミスやリカルドの信念をくり返して新に言々することは不可能であった。そうした論述の内的統一は、現実的というよりはむしろ見せかけであり、高々それは、生産・分配の体制を弁明することによって維持されたのだ。「実際、技術の進撃はひどく無慈悲なものであったので、若き経済学者達は、物理学や生物学の仲間達と同様に哲学から目をそらし、歴史的なものや実際的なものの細部の流れを探求し、そしてますますそこへ深く進み入り、そうすることで絶対的無過誤という土手の足場を失った。有益な現実主義への性向をもつ人々は、実業学校へ泳ぎ渡るか、または銀行の助言者となった。奉仕の気質をもつ人達は、その思考を労働問題や人間立法に向けた。正確さへの情熱をだいた人々は、測定のできるような経済界の部分に数学的手法を応用し、限られた領域で実り多い成果をあげた」¹⁾。このようにして、大学で育まれた科学的研究の精神に、産業的業務執行上の思考や資本と労働間の闘争が混じり込んだのだ。

1) Ch. A. Beard und M. R. Beard, The Rise……a. a. o., II 760 f.

なお、機械時代の発展がその頂点に達する以前に、新しい制度主義的な種の国民経済学の考察が、教室で告げられていた。その信念告白によれば、国民経

経済学者達の第一の課題は、＜多面的な共同研究を通して、時代にあった経済・社会政策の遂行を保障するために、事実を把握し、一般的社会的な発展の方向を考察し、そして一定の状況下で作用している諸要因を検討すべきである＞というのであった。「この志向をもつ著名な一教授が1923年に次のように告げた時、恐らくこれは、その時代の精神をかなり正確に表明していたはずだ。すなわち、もし自分の科学が資本か労働かのいずれかの単なる護教として役立つものだとすれば、それは科学たりうるものではない、と。また仲裁や解釈の中間的立場が不可能な教義化にとって代る唯一のものである、と」⁹⁾。

1) Ch. A. Beard und M. R. Beard, ebenda.

いつものことながら、こうした批判的攻撃はまた、とりわけその端初において反対運動を喚起した。金権政治が花を咲かしていた資本主義体制は、その弁護団なるものを生じさせざるをえず、概して大学においては資本主義的生産様式を是認することが義務であった。エール大学ではサムナー (William G. Sumner) が、その講義や論述においてマンチェスター学派を弁護し、従って産業の将士を弁護した。コロンビア大学ではクラーク (J. B. Clark) が、『富の哲学』や後の彼の『富の分配』という著作において、確に彼の博学と論理を惜しみなく駆使して、次のことを証明しようと努めた。——資本主義体制は、概して、「正義を求めて動く、大ざっぱではあるが、それは依然として正義を求めて動く、この体制をもっと厳密な用語で述べれば、(そこでは) 産業の各々の要因が、特に資本と労働が、概してその貢献に応じて報酬を与えられ、かくして営利企業は、公平正當なわけ前にあずかる」¹⁰⁾ というのがそれだ。フォートンスクール——ペンシルバニア大学に併設して、富裕な工場主達によって創設された——は、保護貿易主義的な関税を、きわめて賞讃に値する経済機構だと明言してはばからなかった。しかし「大学の経済学が、真底必ずしも、かかる単純な信念によって統一されていたのではなかった。営利企業の見地から綿密に調べてみれば、その擁壁には亀裂や割れ目があった」¹⁰⁾。

- 1) Ch. A. Beard und M.R. Beard, The Rise……a. a. o., II 429 f.
- 2) Beard, ebenda.

こうして、アメリカの社会経済学において相対立していた戦線とは、精神的にも、また公の誰にでもわかるほどに際立っていた。だが、そこに明確な区画線はなかったし、相争っている「諸学派の見解の一般的解釈の各々が、ただ極端な限界の立場のみを擱んでいたにすぎないのだ。その二つの対極、つまりクラークとヴェブレンの間にいる個々人の諸見解の全域は、きわめて種々の陰影に満たされていた。だが、まさしくこの多くの異なった見解や信念が、制度主義の専門科学的・一般的精神的な豊富さやその活力となり、当然この制度主義は、従来の国民経済学において一般的であったものよりも、広い研究分野を設定することとなった。さらに、その個々人の公式化は特に多様であり、「誰しもが各々の像を創り上げ、自らの考でそれを力説した。そのことによって、あたかも一つの理論<学派>が一つの問題を論じようとしたかのように、多彩な色あいをもった諸見解の混合が生じ、そしてこの種々な意見が自らを一つの共通な分母でくくることを困難ならしめた」¹⁾。この大きな多面性のためにデーラ (Karl Diehl)²⁾ は、その近代アメリカ国民経済学を、

1. 制度主義学派
2. 行動主義および
3. 社会法学派

とに分けることを提案した。そしてこの分類は、経済学の着想の多面性を、何よりも体系的に整序することには都合のよいものだ。だがそれにもかかわらず、この三つの方向を一つに取り扱うことが正しくもあり、必要でもあるように思える。と言うのは、その三つすべての方向が、同じ「制度主義」の全体像から発しているからであり、それにデーラもまた、その三つの方向に基本的に共通するものをこう指摘しているからだ。すなわち、「それらは、いわゆる純粋理論、つまり古典学流派的純粋理論も限界効用学派の純粋理論も拒否する。それらはすべて、国民経済学の現実的・経験的考察に加担し、国民経済理論を、歴史的

および法的な機関や、また様々な社会的および心理的な諸要因の考察を通して、現実により近く構成しようと欲する」と³⁾。それ故に、「制度主義」という名称は、以下でも従来通り、精神史的にそれと結びつけられた最も広い意味で使用される。と言うのも、およそかかる包括的な問題——つまり知識史的に最も密接に共属し、相互に規定しあい補完しあうようなそれ——は、一般社会理論の見地からして、より広い射程範囲をもつかかる概念を暗示しているからだ。いずれにせよ、「制度主義集団」の内的構造は、今や次にその主たる主張者について論じる際に、充分明らかになるであろう。

1) E. Flügge, a. a. o., 347.

2) Karl Diehl, Artikel 「Volkswirtschaft und Volkswirtschaftslehre II」 in Wörterbuch der Volkswirtschaft, Jena 1933, III 882 f.